

山雲の機構(6)

撮影および説明：大井正一（気象庁）

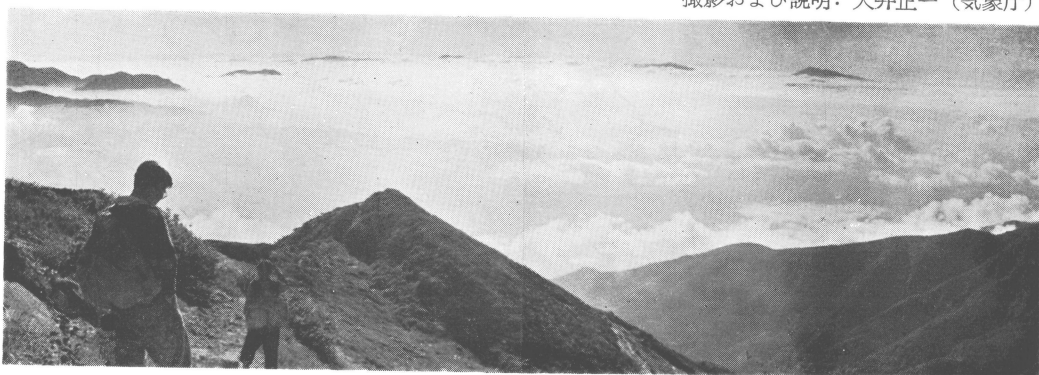


写真 1



写真 2

[1] に7月31日の雲海の状態を示したが、8月1日もこれとよく似た状態が現出したが持続性は遥かに強く、午後迄も安定していた。[2]の第2図を見ると高圧部はオホーツク海に落ち着き脊の低い寒気が下層に入っている。第3図を見てもこれは明かだが、第4図を見れば寒気の侵入は前日より更に甚だしい事が判る。写真1は8月1日8時頃八方の頭附近から見たものであるが、[1]の写真1と比較すれば松川流域がヴェール状になっている模様等は勿論の事、細部に亘っても極めてよく似て居り、

これらの雲海の模様がその日一日だけの偶然のものでない事がよく判るであろう。右手の浅間山の手前、美ヶ原附近の雲海は積雲状になって立ち上がり始めているが、これは美ヶ原の山塊の日射昇温に依るものでであろう。写真2は12時頃の状態、上の樺附近で雲のヴェールを透して下界がはっきり見え始めた有様と、雲海の中から積雲が次第に立ち上がり始めた有様を示している。(1959. 3. 5)

[1] 山雲の機構 (5) 天気 4. 10.

[2] 山雲の機構 (1) 天気 3. 8.